

福島広報

発行 福島地区小学校長会
責任者 会長 嶋原 理
編集 同 広 報 部



【巻 頭 言】

子どもを信じ、期待する

福島市立福島第一小学校長 嶋原 理

今年度は、私にとって節目の年である。4月のスタートにあたり考えたことは、「最後まで教師でありたい」ということだった。既に、担任を離れて20年。授業をしなくなって14年。若い頃のような気合いも熱意も体力もない。教師としての資質・能力は、きっと今が最低である。そんな自分が「教師として何ができるのだろうか？」と考えたとき思い出したのが、平成23年の初等教育資料に掲載されていた、当時、特別活動の教科調査官だった杉田 洋先生のコラムである。

小学校3年生の時、「いただきます」の号令がかけられず、みんなからも、担任教師からも責められ、彼は自信を失っていました。この自信を取り戻すのは子どもにとって大変なこと。そんな自尊心の低い少年に転機が訪れたのは5年生の時でした。

学芸会の主役決めの際、「おまえやれば」「そうだ、おまえがやれ」とからかい半分の言葉がかけられたのです。うつむいていた、そのとき、
「やってごらんさい、あなたなら必ずできます。」

大学を出たての新任女性教師の一言で、誰もが予想しなかった主役が決定したのです。少年は先生の期待に応えたいと必死でセリフの練習をしました。

当日、少年は震える足を床に押しつけながら、第一声をはき出しました。その後のことはよく覚えていません。ただ幕がおりた後、先生や級友が一齐に駆け寄り、「頑張ったね、よくやった」などと口々に褒めてくれました。少年は、このことをきっかけに自尊心を高めていくのです。

その後少年は教師になり、やがて指導主事になりました…(略)…。

「新任女性教師」が、どのような根拠があって「あなたなら必ずできます。」と力強く言い切ることができたのかはわからない。もしかすると、あまり意図的ではない言葉だったのかも知れない。しかし、この教師の一言が、少年の可能性を拓き、未来への指針となったことは間違いない。根拠のない期待は無責任かも知れないが、教師の期待によって学習者の成績が向上するという「ピグマリオン効果」を引き合いに出すまでもなく、人は他者から「期待されている」と感じるとモチベーションが上がり努力をするものである。子どもに期待することは、「必ずできる」と子どもを信じることでもある。

子どもの可能性は無量大である。今、目の前に見える表層的な姿だけで「この子には無理だ」「この子にはできない」などと、子どもの可能性を狭めるような判断は、教師としてしたくない。授業もできない資質・能力最低の私だからこそ、「子どもを信じ、子どもの未来に期待し続ける教師でありたい。教師である限りは、その最後の日まで子どもを信じ、期待し続けたい。」切実にそう思っている。



笑顔の効果

福島市立三河台小学校長 笠原 聡美

「いつも笑顔でいる。笠原校長先生らしいですね。」

期首面談の際に穂積課長からいただいた言葉である。

私は校長として児童と教職員の全員が安心して通える学校を目指している。

そのため、自分ができるとは何かを考え、手立ての中に自分が笑顔でいることをあげた。しかし、自分で手立てにあげておきながら、その言葉をいただいたときに「果たして笑顔には手立てとしてあげるほどの効果があるのかな」と迷いが生じた。その答えは毎朝の登校指導にあった。登校指導で、私は本校の児童だけでなく、そこを通る地域の方や他校生にも笑顔で挨拶をする。初めのうちは「なんだこのおばさん」という感じでスルーしていた人たちも、こちらが笑顔での挨拶を続けた結果、ほとんどの人が笑顔で挨拶や会釈をしてくれるようになった。

登校指導を通じて私は笑顔の効果に気付いた。笑顔は人に安心感を与え、やる気を芽生えさせ、人の行動を変える力がある。そして言動を価値づけることもできる。迷いが晴れた。私は笑顔の効果を最大限に生かし、児童と教職員の全員が安心して通える学校づくりに尽力したい。



「和合」の心

福島市立森合小学校長 柏谷 智也

本校には、四方を校舎に囲まれた場所に素敵な中庭があります。中庭の真ん中には噴水のあつる池があります。暖かくなったこの時期には数十匹の鯉が悠然と泳ぎ、浮島でカメが甲羅干しをしている様子が見られます。先日はカモの親子が現れ、池の中を5匹の小ガモが後をついて泳いでいる姿も見られました。そのほか、ツバメや昆虫、メダカもいて子どもたちのお気に入りの場所となっています。中庭の片隅に目をやると「和合の心」と書かれた看板が立っています。校歌にも「・・・わが学び舎に光あふれる 知・徳・体 和合の心・・・」と歌われています。「和合」の意味を調べてみると「仲良くなること」「親しみ合うこと」とのことです。子どもたちが生き物と親しんだり、子どもたち同士が互いにふれあったりして仲良くなる。まさに、「和合」の庭といった素敵な場所です。

森合小学校の校歌にも歌われ、長年引き継がれてきた「和合の心」への思い。「仲良くなること」「親しみあうこと」の思いには、子どもだけでなく、保護者、地域の方々が「和合の心」で、森合小学校を創っていきたいという思いが込められているのだと感じます。その思いを胸に校長として、日々精進してまいります。



伸びよ 蓬菜の子ら

福島市立蓬菜東小学校長 佐藤 和彦

この4月から、蓬菜東小学校へ校長として着任しました「佐藤和彦」と申します。蓬菜東小学校には10年前に教諭として奉職していました。折しも「東日本大震災」が3年目に起こり、福島県全体がとても不安定な時期でもありました。そんな中でも、全職員が一丸となって着実に学びを進めていたことを思い出します。

話は変わりますが、昭和57年4月に蓬菜東小学校が蓬菜小学校から分かれて開校した時に、1つの石を2つに割って、それぞれの校地に設置した石碑「伸びよ 蓬菜の子ら」があります。

4月に校長として着任したときに真っ先に見に行ったのはこの石碑でした。校長として石碑の前に立った時に、校長としてこの学校を経営していく責任感を感じ、最善を尽くしていこうという決意をもちました。

朝、校門に立って、子どもたちに挨拶をすると、「校長先生、おはようございます」と挨拶を返してくれます。校舎内では、6年生が朝の掃除を進んで行っています。そうした素晴らしい蓬菜東小学校の子どもたちの明日に向かって、全力で取り組んでまいります。ご指導・ご支援のほど、よろしくお願い致します。



何ができるか

福島市立御山小学校長 高澤 里美

朝の空気を思いきり吸って「おはようございます」と声をかける。「おはようございます」という子どもの声を聞く。この瞬間が好きだ。しみじみ、子どもが好きで教員になったことを実感する。とはいえ、私は、多少人より大きな声を張れるくらいで、ピアノもだめだし、歌声も美しくない。なにか専門的に秀でているものもない、教員としては何の取り柄もない人間だ。だから、愛情だけを握りしめて、大好きな子どもと一緒に、ただただ授業を楽しむだけの日々を長年過ごしていた。

そんな私が、授業をしない校長という立場で学校にいる。何ができるだろう、と考える。たいそうなことはできないが、授業の楽しみ方を教員に伝えることはできる。子どもの成長をそばで感じることの幸せをかみしめる教員を育てることはできる。と信じて、今日も校門に立つ。

うつむき加減で登校する子どもが、少し顔を上げてあいさつしてくれるようになった。出勤してきた教員が、きのうの子どもの成長を笑顔で話している。そんな、一つ一つの出来事が、素直に嬉しい。私は、この子どもたちと教職員のためにここにいる、そう実感する毎日を送っている。



吾唯知足(足るを知る)

福島市立松川小学校長 小林 将路

「白い横雲 なびかせて 朝 晴れわたる 吾妻山」(校歌より)

本校は校長室が2階にあり、その窓からは吾妻山、安達太良山を建設中の義務教育学校の新校舎、新体育館越しに一望することができます。松川小学校は「笑顔あふれ、ひとみ輝く子どもいっぱい学校」を目指しており、さらに一步進めて「子どもも、教職員も、保護者も、地域の方もすべての人が笑顔の学校」でありたいと考え職務にあたっております。4月に赴任し、これまで一日一日があたりまえのように過ぎていきました。しかしながら、松川小学校にとって、今年度は開校から151年にして最後の一年間となり、一日一日、ひとつひとつの活動、行事などが貴重な出来事となります。先日の鼓笛パレードでは最後の校歌演奏となりました。

この貴重な時に校長の職を拝命し、身の引き締まる思いを感じる毎日です。学校に関わるすべての人が笑顔で、あたりまえの一日一日が過ぎていくことを「足りている」、幸せであることを肝に銘じ、425名の松っ子たちのために精進してまいります。今後とも、ご指導のほどよろしくお願い申し上げます。



あたりまえの毎日

福島市立平田小学校長 山田 美由紀

通勤途中の車窓からは、夏の装いの吾妻山が見えます。毎日励まされているようで、その姿を見ながら通勤しています。着任した時はまだ雪が残る吾妻山でした。早いもので2か月が過ぎ、すっかり雪は消えました。

私の一日は、朝の登校指導から始まります。近所の方々にも声をかけていただき、元気に「おはようございます」という子もいれば、黙って通り過ぎる子もいます。心配なので担任の先生と話をします。昼になれば、「おいしい給食いただきます。」と元気な声が聞こえてきます。下校時は「さようなら」の声。これが私のあたりまえの毎日です。私は震災当時、浜通りの学校に勤務していました。あたりまえの日常、学校がなくなりました。あたりまえのありがたさを痛感しました。そして、私がやるべきことの一つに子どもたちのあたりまえの学校生活を守ることだと考えます。ただ、これは先生方、保護者、地域の方々の協力、支援をいただきながらでなくてはできません。さまざまな方々の応援をいただきながら、それに感謝しながら、子どもたちを守っていきたいと思います。福島地区の校長先生方のご指導どうぞよろしくお願い申し上げます。



子どもが真ん中にある学校

福島市立野田小学校長 渡辺 博明

野田小に赴任が決まった時、お世話になったある大先輩の先生の顔が浮かびました。実は、その先生も、若い頃に野田小に勤務されていました。その先生には、出会ってから四半世紀の間、何度も問われ続けました。

「博明さんよう、それで本当に『子どもが真ん中』にいる学校って言えんのがあ。」

今、改めて、この言葉の意味を考えています。

「アサガオがくると巻き付いてるよ」と、発見の喜びを友達に意気揚々と語る1年生、縦割り活動で学年を超えて遊ぶ中で自然と笑顔がこぼれる子どもたち…、何気ない日常の中に、小さな成長や人と触れ合う喜びがあふれていることを改めて思います。学びの充実感を味わえる場所が学校であり、そのためには、授業をはじめとした教育活動の充実は欠かせません。その先に、はじめて「子どもが真ん中」にいる学校があるのだと考えます。

これからも、本当に「子どもが真ん中」にいるかを考え続け、明日の子どもたちの幸せのために、教職員一丸となって励んでいく所存です。校長会の皆様には、今後ともご指導をよろしくお願いいたします。



川俣の地で 精一杯

川俣町立川俣小学校長 佐々木 信晴

『野馬追の里 南相馬太田より、絹の町 川俣町』へ着任し早2ヶ月。前任校の約7倍の子どもたちの名前を必死に覚えようと奮闘する毎日です。

私の毎日の楽しみは、朝の登校指導。町内に2カ所あるスクールバスの発着所。そして、広い玄関前。私は毎日、その3カ所を日替わりで回ります。川っ子たちを迎えながら、地域の方々と挨拶を交わり、何気ない会話をするのも楽しみのひとつです。そんな中、最近うれしいことがありました。それは…。川っ子たちが、私の目をしっかりと見て、笑顔であいさつをしてくれるようになったことです。川っ子たちと挨拶を交わしながらふれあうことができる、そして、川っ子たちから元気がもらえる朝のこの時間が、私にとって至福の時間です。

さて、話は変わりますが、小さい頃から鉄道好きの私。5月のある日、とある鉄道に乗りに行きました。その鉄道は栃木県にある『真岡鐵道』。かつて、養蚕・絹織物で栄えた川俣町には川俣線という鉄道が走っていました。その川俣線で走っていたSLが真岡鐵道で活躍しているのです。それも『川俣号』という愛称で…。実際に乗ってみると力強く、川俣の歴史を身にまといながら堂々と走り続けているその姿…。プライドを感じました。うれしくなりました。

『新生川俣小学校』になって3年目。川俣小の子どもたちには、「川俣町の小学校に通っているというプライド」をもって、新たな歴史を刻んでほしいと願っています。故郷を離れても走り続けるあのSLのように。そのためには…私自身もまだまだ学ばなければなりません。福島地区の先輩の校長先生方のご指導を仰ぎながら成長してまいりたいと考えます。どうぞご指導よろしくお願いいたします。



私の趣味

福島市立蓬萊小学校長 石井 隆博

もう40年近く昔のことだが教員採用試験の面接で趣味を問われた。当時の私には趣味らしい趣味もなく、さすがに「麻雀」とは言えずに「ドライブです」ととっさに口から出たことを覚えている。今日まで、ゴルフにはまったり、最近では毎週のように温泉に通ったりしてはいるが、かじってはふらふらのことが多い中、ただ一つ長く続けていることがある。それは「釣り」である。30歳になった頃に溪流釣りを始めてみた。何がきっかけだったかは忘れてしまったが、小学生の頃によく阿武隈川の県庁裏の隈畔でオイカワやクチボソを釣って遊んでいた。10歳前後の経験が大人になっても根付いていて、その記憶が理由やもしれない。「溪流釣り」と言うと聞こえはいいが、私の場合は郊外の里川の「こんなところで？」と言った釣りである。釣法も仕掛けも我流も我流、邪道極まりない。決して自慢できるものではないが30年ほども続けている理由は、大きく二つある。一つは「意外性」である。私が狙うのは溪流の女王と言われるヤマメや幻の魚などとも呼ばれることもあるイワナである。川幅わずか1～2m足らずの沢に糸を垂らした瞬間、尺を超える大物が食ってくることもある。阿武隈川のような大河であれば大物が掛かってもおかしくはないが、まさに「こんなところで？」と言わんばかりのところで尺ものが掛かるという「意外性」は何度味わってもたまらない魅力である。もう一つは、魚が餌に食いついたあと竿を通して伝わってくる「躍動感」である。特にヤマメは流れの速い瀬でも推進力があるので、針から逃れようと縦横無尽に水中を走り回る。糸を切られないよう魚が疲れてくるまでバトルするが、大物ともなると竿のしなりは尋常ではなく、糸がピュンピュンと風切り音をたて、竿を持つ腕がしびれてくるほどである。バーチャルでは味わえないリアルがここにはある。このなにもものにも代えがたい喜びをこれからも味わいたいと思い、なんとか釣り上げられても魚はすべてリリースしている。しかし、台風などによる度重なる増水と護岸工事の影響で川底には砂がたまり、魚の住処も失われつつある。豊かな自然と私の趣味がこの先も続くことを願っている。



人とのつながりで実現した平成の黄金バット

福島市立庭坂小学校長 長澤 昭仁

それでは紙芝居黄金バットの一部をご紹介します！

連続冒険 空想科学 大活劇 黄金バット ナゾー編であります・・・

これは、私のかくし芸のひとつである自転車紙芝居の定番「黄金バット」はじまりの口上である。世の中がミレニアムと沸く2000年、私は社会教育主事として伊達町に派遣され、そこで家庭教育講座「子育てひろば」を任された。それを、運営協力を町から委嘱された子育てワーカーと呼ばれるお母さん方数名と運営したのだが「毎年、秋は神社へ散歩に行き、そこで読み聞かせなどを行っているんです。」と活動の一端を聞いたとき、あるノスタルジックな光景がひらめき「じゃあ、今年はそこへ昔みたいに自転車紙芝居のおじちゃんが現れて、お菓子でも配りながら紙芝居を見せるってのはどう？」と思いつきで言ってしまったのが発端である。(私自身は、子ども時代に自転車紙芝居を見た経験はないのだが・・・)紙芝居の舞台を付けた昔ながらの自転車やその時代の紙芝居など、何もあてはないのにである。特に、黄金バット時代の紙芝居は、もう文化財級に貴重なものになっていて容易ではなかったが、とにかく人とのつながりのおかげで、どちらも奇跡的に準備ができ、無謀な構想は実現した。公演各所で見られた、引き鮎をなめ、そのひもを口からぶら下げながら紙芝居に興じる子どもの姿が忘れられない。

派遣の3年間は、地域の育成会のイベントや完全学校5日制前の土曜日の学校活動、我が子の学校の昔遊びの会にも呼ばれたり、子どもたちだけでは飽き足らず、職場の忘年会や同僚の結婚式にまで持ち込んだりして、何度も演じた。おかげで、特に公演の多かった演目「黄金バット」「ポンチ」「ジャングルボーイ」「キンちゃんコロちゃん」は、始めた時から四半世紀を過ぎた今でも完璧に覚えていて、いつでも公演スタンバイオーケー状態である。

現場復帰後も、赴任した6校すべてで公演継続中なのだが、実は、昨年赴任した本校ではまだである。あと2年後に役職定年を迎えるが、それまでには本校でもぜひ演じる機会を見つけ、教員人生の有終としたい。

・・・睨みつけるバット、睨み返すナゾー、二人の間は真空であった！ バットが勝つか、ナゾーが勝つか、はたまた破壊光線の秘密は一体誰のものになるのでしょうか。続きは次回のお楽しみであります・・・

第Ⅲ期研究スタート ～校長の資質能力向上のために～

研究部長 福島市立金谷川小学校長 旗野 礼子

今年度から、新しい副主題「福島に誇りをもち多様な他者と協働しながら持続可能な社会を創る子どもを育てる学校経営と校長の在り方」のもと、第Ⅲ期研究（令和6・7年度）がスタートしました。今年度は副主題の変更だけでなく、研究体制にも大きな変更が加えられました。学校数（校長数）の減少を受け、持続可能な研究を行うために、昨年、県で研究体制の見直しが行われ、研究の進め方や参加する支会の役割も大きく変わりました。具体的には、「発表支会」と「選択支会」に精選され、本支会も東方部と北方部が同じテーマで研究を進めることにより、3つの発表を4方部で分担、選択を1方部として、研究を進めることとなりました。この見直しにより、10分科会のうち半数が「発表支会」のみ、そのうち本支会では半数に近い4つの分科会を研究推進することとなり、本支会の果たすべき役割がさらに大きくなったのではないかと考えます。

さて、この副主題に掲げられた「子ども」の育成のためには、学校経営の責任者である校長が時代を見通した教育理念をもち、校長の資質能力向上のために、自らの指導力や人間性を磨くことが不可欠です。そのためには、校長自身が学校経営力を高める「自己研鑽の場」を持つことが重要であり、私たちにとってその礎となるのが本支会です。方部長の校長先生を中心に、日頃から情報交換をしたり、各校の課題や学校運営上の悩みを相談したりする中で、安心して自己開示しながら研究を進められるという、素晴らしい協力体制が醸成されています。

今年度は第1年次研究であり、「令和6・7年度 研究の手引き」を中心として、研究の趣旨、研究計画、研究内容などを立案し実践的な研究を進めます。8月20日には支会大会を開催します。短い準備期間ですが、学校として「何をしたか」ではなく、目標達成のために、校長として「誰に対して」「どのような働きかけ」をしていくかを明確にして、実践していくことが大切です。各校長先生方が個々に積み重ねた実践の紹介や調査結果等の報告を、「教職員や保護者等への関わり」や「校長の具体的な働きかけ」に焦点を当てて分析し、これからの校長の果たすべき役割と指導性を究明していきたいと思えます。

広報部活動について

広報部長 福島市立下川崎小学校長 丹治 達也

今年度も福島地区広報部は、「会員相互の理解と連携を深め、地区小学校長会活動を活発に推進すること」を目的にして、以下の編集方針のもと、年2回の「広報福島」を発行する予定です。

- 1 校長職の機能の向上及び地区校長会の活動に寄与する内容を目指す。
- 2 課題性、適宜性、必要性、話題性に富んだ魅力ある広報誌を編集する。

以上の編集方針を踏まえ、広報誌の内容は「巻頭言」「新会員紹介」「特集（趣味・随想）」「専門部活動紹介」「特色ある学校経営」「方部だより」を予定しており、それぞれ会員の皆様に原稿の執筆をお願いしております。

昨年度より学校数の減少や編集者の負担軽減、働き方改革の一環など様々な理由から年間の発行回数を4回から2回としました。そのため、掲載コンテンツや執筆者などの見直しをしながら今年度も発行していきます。全体の情報量は減少しますが、それぞれのテーマで寄稿していただく内容は貴重な情報で、広報誌発行の目的、編集方針を十分に達成できるものになると思えます。

「新会員紹介」「特集（趣味・随想）」ではそれぞれの先生方の人となりを知ることができ、会員相互の理解と連携を深めるためにとっても役立っていると思えます。また、「特色ある学校経営」「方部だより」などはそれぞれの学校、方部の活動を知ることができ、それを生かすことで地区小学校長会活動が活発になると思われます。

このように「広報福島」は様々な情報がつまった広報誌となっています。発行回数は減りましたが、その分中身の濃い内容とし、それぞれの会員に十分時間をかけて読んでいただくことで価値ある広報誌としていきたいと思えます。

現在様々な見直しが必要な「広報福島の過渡期」に入りました。今年度の活動を踏まえ、掲載コンテンツのさらなる見直しやデータによる発行など時代に合った広報福島の在り方を探っていきたく思います。

今後とも広報福島発行への会員の皆様のご協力をどうぞよろしくお願いいたします。

編集後記

原稿を拝読させていただき、伝統を守りつつ変革に取り組もうとする先生方の熱い思いがひしひしと伝わってまいりました。また、趣味・随想では多忙であっても、心にゆとりをもつことの大切さを実感いたしました。各部だよりでは、時代の要請に応えつつ歩み続ける方向性についてお示しいただきました。お忙しい中、原稿をお寄せいただいた先生方に感謝申し上げます。 福島市立大笹生小学校長 山本 巖